

医学博士のメデイカル・コラム 病気が教えてくれるもの

第49回 忘れてはいけない記憶

マスク、フェイスシールド、ビニールシート越しの接客、無人のコンビニ、仕切られたテーブルでの食事、…。これらを聞いて「安心」を感じる人は多いのではないだろうか。このような人は、固い握手、熱い抱擁、スキンシップ、人との触れ合い…と聞けば、きっと「危ない」と感じることだろう。もしそうであるなら、「あなたの心は非常に危険な状態にある」と警告しておこう。何故なら、このような兆候は、人間存在を、病原体そのものと同一視し始めているサインであるからだ。

新型コロナ・ウィルスの感染者数が再び増加している。けれども、感染よりもずっと破壊力のある“恐怖心”という名のパンデミックは、人間から、とても大切なものを奪ってしまった。日本において、このウィルスによる死亡率はインフルエンザの比ではなく、非常に低い。感染の現状から考えても、通常の風邪か、あるいはインフルエンザに対する対応で十分であるのに、連日、感染者、重症者、死亡者の数をカウントし、感染者や感染経路を特定することで「クラスター認定」をして、人々の恐怖心や不安感を煽り続け、

結果的に、「人を避けること」が正しい事であり、その“作法”を流布し、それに従わない人を“敵視する”文化までが根付いてしまった。

ウィルスが人間から奪った最大のもは、「人命」ではなくて、「人間が温かい存在であるという記憶」である。この「人を避ける」目的の“新しい生活様式”とやらを大義名分として、様々なITテクノロジーの開発が、人間をより一層「冷たい存在」へと追い込んでいる。決して、世の中の発展や利便性を否定するわけではないが、「人が人と関わらなくなるような世界」は、果たして我々が目指すべき世界であり、そのような世界で、いったい誰が幸福感を得ることが出来るのだろうか？人と人が直接関わることでしか生まれえない、「気持ちのこもった温かい触れ合いの記憶」を、決して忘れないでいて欲しい。いつか必ず、そこに戻る日のために。

医学博士 木村謙介

北海道大学医学部卒。慶應義塾大学医学部循環器内科専任講師などを歴任。
米カリフォルニア大学サンディエゴ校医学部留学、最先端の基礎医学と豊富な臨床経験を
持つ。「大きな病気を発症する前にその芽を
摘み取る方が医療レベルは高いはず」の信念
で2012年、きむら内科クリニックを開設。



医療法人

きむら内科クリニック TEL 044(981)6617

麻生区五力田2-14-6

きむら内科クリニック 麻生区 検索